

アレクサンドロス大王ゆかりの都市

「アレクサンドロス大王の東方遠征」と聞けば誰しも学生時代に学んだ覚えがあるだろう。アレクサンドロス3世王は紀元前356年、ギリシャの近隣マケドニアに生まれ、父フィリポス王が暗殺されたことで若くして王の座についた。そこからアレクサンドロス王の勇躍が始まる。

アレクサンドロスは父の遺志を継いで紀元前334年、ギリシャ軍を率いペルシャ東征に出発した。それまではあまり領土的拡大を志向していなかったギリシャが東に向かって展開し、結果として中近東や北アフリカ、パキスタン、インドにかけての大帝国を築くことになる。これによってギリシャ文明が東方に伝わったばかりでなく、ペルシャやエジプトなどのオリエン文明と融合し、いわゆるヘレニズム文化を創る契機となった。

アレクサンドロスは征服地に「アレクサンドリア」と自らの名前を冠した都市を建設した。その数は12とも18とも言われる。これは単に東進を続ける軍への兵站基地というだけでなく、交易や交通、情報の拠点となるような本格的な都市であった。

しかし、そのなかで現在まで当時の姿を残している都市は、エジプトのアレクサンドリアが唯一である。なぜ、この都市だけが建設当時の姿を維持しながら生き続けられたのだろうか。

新都市・アレクサンドリア

アレクサンドロスは紀元前332年にエジプトを征服する。王国が弱体化していたエジプトで、アレクサンドロスは解放者として迎え入れられた。王は、マケドニア兵士のための新都市をつくるよう命じたが、自身はこの年にバビロンで謎の死を遂げた。新都市の場所は事前に選ばれており、これがアレクサンドリアとなる。

どうしてこの場所をアレクサンドロスは選んだのだろうか。モスタファリによれば、立地選定にはいくつかの要因がある。

第1は直感である。王はある夜、夢枕に敬愛してやまないホメロスが現れ、エジプトの地中海にある小島・ファロス(パロス)島に関する『オデュッセイア』の一節を朗読したという。現地を訪れたところ、島の向かい側には舌のような陸地があり、新都市の場所として好適であった。王は「ホメロスは他のあらゆる尊敬すべき資質にもまして優れた建築家である」と、その啓示に敬意を表したという。

第2は港である。古代エジプトの北部海岸には実質的に港がなかった。アレクサンドリアの地はファロス島の島影を利用して港の建設が可能であった。

第3は水である。アレクサンドリアの陸側には広大な内陸湖マレオティス湖をもち、水が豊富であった。こうして新都市の場所は決まった。

ギリシャ人都市計画家のデザイン

王の遺志をついでアレクサンドリアの建造にあたったのはプトレマイオス1世王だった。プトレマイオスは、アレクサンドロスの遺体を略取しアレクサンドリアに埋葬し、その正当な後継者として古代エジプトのファラオであることを宣言した。

FLAVOR OF CIVIL ENGINEERING INHERITANCE

土木遺産の香

第49回

ヘレニズム文化を支えた 世界初の百万都市 「アレクサンドリア」

(エジプト)



日本工営株式会社/コンサルタント海外事業本部
運輸・交通事業部/開発計画部長

山田 耕治
YAMADA Koji

都市の設計はロードス島の建築家ディオクラテスがたった。ディオクラテスはアレクサンドロスに、ギリシャの聖なる山アトスに王にちなんだ都市を建設するよう進言していた。しかし居住環境を考えていなかったという理由で、王はこれを却下していた。ディオクラテスにとってアレクサンドリアの都市計画は、その雪辱だったわけだ。

そしてプトレマイオスは、エジプトの都をナイル河畔のメンフィスからアレクサンドリアに移した。こうして古代エジプト史で最後の、ギリシャ人による王朝の新たな都が建設された。

地中海をつなぐ港の建設

ギリシャ人のプトレマイオスにとって、アレクサンドリアは母国との交易に有利な立地であった。アレクサンドリアは地中海に面しているため港が建設された。沖合のファロス島まで堤防を伸ばし、その両側を港にすることにした。この堤防はヘプタスタジオンと呼ばれた。スタジオン(スタジア)というのはギリシャの距離単位で約180m、堤防の長さが1,260mであったため、「7(ヘプタ)スタジオン」と名づけたわけだ。今ではこの堤防の両脇は砂が溜まり、ファロス島が陸続きの半島になっているが、両側に設けられた港湾は、現在に至るまでエジプトの中核港として機能し続けている。

実は、港にはもう一つのもくろみがあった。それはナイル川を通じた上エジプトとの交易である。ナイル川はカイロのあたりでいく筋かの支流に別れ、デルタを経て地中海に流れ込む。その西側の支流はアレクサンドリアの東、ロゼッタ石の発見で有名なロゼッタのあたりで海に出る。しかし、往々にして河口が砂で閉塞し、航行が難しかった。そこで、最西のカノピック支流が流れ込むマレオティス湖からアレクサンドリアに運河を開削し地中海と繋ぐと、アレクサンドリア港から直接、この支流を経て上エジプトに航行ができる。そこには古都メンフィスやアスワンに加え、穀倉地としてプトレマイオス朝がその開発に力を注いだファユーム地方も含まれる。



ローマ時代の格子状の道路網が今も生きている中心市街地

港にはさまざまな船が行き来したであろう。アレクサンドリアは賑やかな港町となり、ギリシャやローマ、地中海沿岸、さらには世界中の文物が集まって取引される交易地・エンポーリアムに成長していった。

この良港を生かした貿易による蓄財が、ギリシャとオリエンが融合したヘレニズム文化の中心地としてのアレクサンドリアを支えた。

世界の七不思議に数えられた大灯台

古代世界には不思議な巨大建造物があった。その一つに数えられるのが、プトレマイオスが港と

時を同じくして建設したファロス島の大灯台である。最近の研究では、建設時期は紀元前297~283年といわれる。英語でpharosという言葉は「灯台」を意味する。地名が一般名詞になるほど、それは有名な灯台であったのだろう。

灯台は3層構造でできており、基壇は四角柱、その上に八角柱の2段目があり、最上段は円柱状であったという。高さは135mに達し、80km先からも見えたという灯火は、ナフサを燃やしたという説もある。

現存していれば間違いなく世界最古の灯台であるが、残念ながら何度かの地震により損壊し、1303年

の大地震によって完全に倒壊したという。

ナイルの水と地下タンク

エジプトはもともと乾燥地域である。エジプトは降雨量が少ないから、雨水に頼ることはできない。水はアレクサンドリアの生命線ともいえる。

アレクサンドリアはナイル川の水に頼っている。プトレマイオスは都市建設と同時に、ナイル川の西側からアレクサンドリアに至る新しい運河を開き、それによって夏季に増水するナイルの水を引いた。そして建物や街路下などにおびただしい数の地下タンクを建造し、増水がピークになる8~9月に水を貯めた。こうした地下タンクは100箇所以上あったというが、

現在見られるものはほんの僅かだ。

アレクサンドリア大図書館

アレクサンドリアをヘレニズム文化の中心都市に押し上げたのが、大図書館の存在だろう。

プトレマイオスはオリエントに関するさまざまな言語で書かれた本を収集し、一つの屋根の下に収めることをもくろんだ。そしてプトレマイオス朝は大図書館を徐々に拡大していった。この頃、アレクサンドリアに到着する旅人は、持ち物にある書物を供出させられ、大図書館ではその写本を作っては本人に渡していたという。

大図書館はヘレニズム文化の粋を集め、蔵書

隣接する土地には公衆浴場も造られた。また市街地を取り囲むように延長15kmにおよぶ市壁が建設された。

紀元前60年頃にアレクサンドリアを訪れたギリシャの歴史家ディオドロスは、アレクサンドリアが世界最大の都市であり、それに続くのはローマであると述べている。ローマの人口を90万人とも記しているから、この頃のアレクサンドリアは、人口が100万人に届くほどの巨大都市であったと推測される。

イスラム時代における変容

アレクサンドリアはローマ帝国の衰亡とともに、7世紀以降はイスラムの波にさらされた。ファロスの

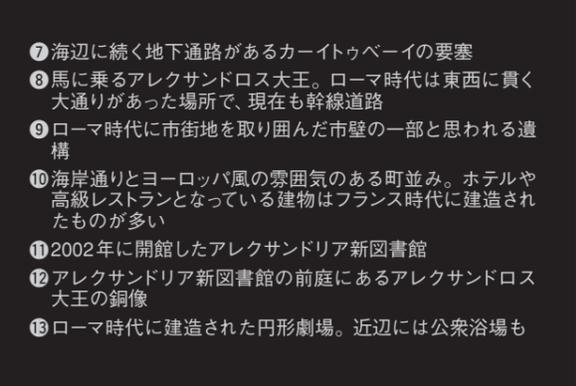
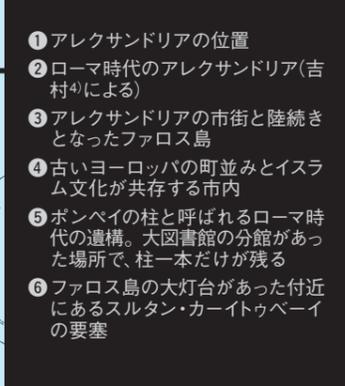
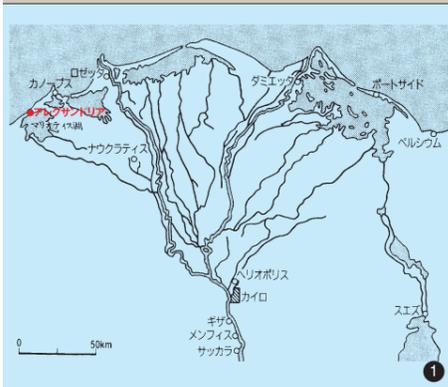
大灯台のあった場所の近くには、15世紀にスルタン・カーイトゥベイが堅固な要塞を建てた。

ファロス島は陸続きになったが、両側の港は西港がイスラム教徒、東港はキリスト教徒と仕分けされ、世界の貿易港として栄えた。

ギリシャ・ローマの街並みは、目抜き通りとなる道路を狭くし、網の目のように路地を張り巡らしたイスラム都市に変貌していった。

近代から現代

エジプトはその地勢的な重要性から、ヨーロッパの列強たちの関心を集めた。ナポレオン・ボナパルトは1798年、アレクサンドリアに上陸、占領する。



- ① アレクサンドリアの位置
- ② ローマ時代のアレクサンドリア(吉村⁴⁾による)
- ③ アレクサンドリアの市街と陸続きとなったファロス島
- ④ 古いヨーロッパの町並みとイスラム文化が共存する市内
- ⑤ ポンペイの柱と呼ばれるローマ時代の遺構。大図書館の分館があった場所で、柱一本だけが残る
- ⑥ ファロス島の大灯台があった付近にあるスルタン・カーイトゥベイの要塞

- ⑦ 海辺に続く地下通路があるカーイトゥベイの要塞
- ⑧ 馬に乗るアレクサンドロス大王。ローマ時代は東西に貫く大通りがあった場所で、現在も幹線道路
- ⑨ ローマ時代に市街地を取り囲んだ市壁の一部と思われる遺構
- ⑩ 海岸通りとヨーロッパ風の雰囲気のある町並み。ホテルや高級レストランとなっている建物はフランス時代に建造されたものが多い
- ⑪ 2002年に開館したアレクサンドリア新図書館
- ⑫ アレクサンドリア新図書館の前庭にあるアレクサンドロス大王の銅像
- ⑬ ローマ時代に建造された円形劇場。近辺には公衆浴場も

数は53万巻とも70万巻とも言われ、当時世界で最高水準を誇っていた。数学者ユークリッドや科学者アルキメデスを生み出したのも、世界的な図書館を有するアレクサンドリアゆえのことであった。

クレオパトラの選択

アレクサンドリアは女王クレオパトラの都市でもある。プトレマイオス12世の娘として、紀元前69年に生まれたクレオパトラ7世は、ローマ帝国と外交関係を持つことで王朝の運命を切り開こうとした。この頃のプトレマイオス朝は政権が腐敗して弱体化し、強大なローマに脅かされ、細々と王国を運営していた。

18歳で女王となったクレオパトラは、王国の生

き残る道はローマの庇護を得るしかないと考えた。ローマの英雄カエサルとのあいだに息子をもうけ、カエサルの死後はアントニウスと恋に落ちた。しかしローマの庇護のもとでエジプトを繁栄させる試みは失敗し、クレオパトラは自害することになる。クレオパトラが志向したローマ化の路線は、皮肉なことに、プトレマイオス朝の滅亡とともにローマによる併合という形で実現する。

さてアレクサンドリアに目を戻すと、ローマはアレクサンドリアを大きく変えた。長さ5km、幅30mの凱旋用の大通りが作られ、それに平行・直行する副幹線道路の幅は15mで、格子状の街路が建設された。幹線道路沿いの窪地を利用して円形劇場が、

その後、フランス軍を破りエジプト副王になったモハメッド・アリの近代化改革により、ナイル・デルタで綿花が栽培されるようになり、その積み出し港となったアレクサンドリアは国際貿易都市として繁栄を始める。

1970年代には、古代の大図書館の再建が企画され、ユネスコをはじめ多くの国と国際機関の支援により、2002年アレクサンドリア新図書館が再建された。地下3階、地上7階の建物は東京ドームの2倍くらいにあたるそうだ。

そして、今なおクレオパトラは謎めいている。財宝とともに埋葬されていると信じられている女王だが、その宮殿や墓はいまだに見つかっていない。アレ

クサンドロス大王の近くに埋葬されることを熱望していたクレオパトラだが、いずれの墓も未だ見つからず発掘が続いている。発見されれば、ツタンカーメン王の墓の発見を上回る、古代エジプト史の“大事件”となることだろう。

謎の多いアレキサンドリア、みなさんもロマンを求めに旅してはどうだろう。

参考文献

- 1) モスタファ・エル＝アバディ『古代アレクサンドリア図書館』中公新書 1991年
- 2) 野町啓『謎の古代都市アレクサンドリア』講談社現代新書 2000年
- 3) Jean-Yves Empereur, Alexandria; Past, Present and Future, Thames and Hudson 2002. (邦訳『魅するアレクサンドリア』1999年 河出書房新社)
- 4) 吉村作治『クレオパトラの謎』講談社現代新書 1983年

写真:筆者撮影